資料２

4/24　第１回持続可能な魅力ある田園地域検討専門部会　委員ご発言概要

【荻布委員】

・氷見市久目地区在住。出身は射水市で、東京でメディア関係の仕事などに従事したのち、2016年にＵターンし、東京出身の夫と共に氷見市に移住。最初は氷見の海側に住んでいたが、2018年に氷見の中山間地に引っ越し。普段は編集・広報関係のリモートワークをしながら、農業まわりの仕事や料理教室などをしている。食の豊かさや大事さを伝えるだけでなく、人の心の癒やしや活性化につなげたいと思い「ナチュラル美食セラピスト」という肩書をつけた。

・夫が認定農業者として自然栽培をしている。拠点ができたことで、空き家を紹介して移住につなげたり、２拠点居住希望者や、農のある暮らしに興味を持つ方などが定期的に通ってくるようになったりなど、小さくではあるが交流・関係人口の増加や移住定住者の増加に貢献できるようになってきた。最近では、氷見稲積梅についてクラウドファンディングで全国に発信したり、廃校になった小学校を活用した久目地区交流館で食のワークショップをしたりしている。

・活動が新聞に掲載され、地元のお母さんたちから声をかけられることが増えた。地域の寄り合い等は男性中心なので、こういった繋がりができることが有り難いし、生かしていきたい。女性である自分が、地域にあるものを活かしてどのように地域内外に何らかの価値を提供していきながら、地域にも貢献できるかを、個人的に課題だと感じている。

・地域の四、五十代の方々が中心となり、中山間地の活性化を掲げて耕作放棄地でカボチャを栽培している。昨秋には久目地区交流館でハロウィンフェスを実施し、市内外から多くの来場者があった。運営側がとても楽しく元気に活動しており、内発的な活性化事例のモデルにもなりうるのではないかと考えている。

【佐藤委員】

・ここの土地は越中瀬戸焼という焼き物の産地でもあり、縄文土器も発掘されている。何千年前から焼き物を作っていた土地で、同じ風景を見ながら今も焼き物作家が活動をしているというところに惹かれて2014年に移住した。

・この上東地区には小学校が４校、中学校が１校あった。もとは子供が1,000人ぐらいいたが、2019年に最後の学び舎がなくなった。今は子供が50人ぐらいしかいない。この上東を元気にするために、陶芸家である私に何ができるのだろうという中で始めたのがクラフトフェア。ＮＰＯ法人立山クラフト舎で、ものづくりの作家さんが全国から集まる「立山Ｃｒａｆｔ」というイベントを主催している。

・この地域の課題は、小学校がなくなってしまった現在でも、旧小学校単位で地域が運営されており、上東というより広い単位で考えることがなくなっていること。上東地域としては越中瀬戸焼き「かなくれ会」、ヘルジアン・ウッド、立山Craft、白岩酒造や白雪牧場など魅力ある要素が生まれてきている。

・「上東地区で集まる会」という緩い会をつくって、これからの地域を担う４０代ぐらいの方が気軽に集える場をつくりたいと動いている。活動のゴールとして、「集落の教科書」の作成を考えている。富山県内では魚津市の片貝地区で地域おこし協力隊の方が作成された。移住者にとっても、新しくここにお嫁に来る人にとっても、新たに事業を始める人にとっても、地域のことを知る上でとてもいいもの。地域のルール、消防団ってどんなもの、年間行事はこんなのあるよとか、こんなふうに子供が過ごしているよということも入れ込めたらいいなと思っている。

・イベントを運営していて思うのは、30代が中心となって運営するイベントは子育て世代を呼び、60代の方が運営するイベントにはやはりその世代の方が訪れる。地域づくりを還暦以上の方が運営している中では若い世代が離れていく。この課題解決につながることがしたい。女性が活動しているところには幅広い世代が来てくれる印象がある。２０代の方、女性の方が来られていたというのは大事。

【川端委員】

・出身は横浜市。両親が富山県出身。小さい頃から長期休暇は富山にいる感じだった。最初は一般企業で勤務し、インテリアコーディネーターの資格を取ってから建設業界に転職。2009年に朝日町へ移住。富山県に来てから学芸員の資格を取り、まいぶんＫＡＮで８年勤務している。

・この地域の土器が好きだった。こういうものを作っていた人が5,000年ぐらい前にいた。その土地に今自分が住んでいる感動を人に伝えたいという気持ちで移住した。地域の方とか博物館に関わる方に本気を味わってもらうために、「博物館でできる本気の遊び」をテーマにして活動している。

１　大平集落のツアー：黒部市美術館と共催

人と自然のかかわりをテーマにした作品を鑑賞するツアーの中で、地域の方を案内人にして地元の歴史を語ってもらう。昔、家に祭られていた屋敷神のほこらのルーツを教えてくださいと話すと、地元の案内の方が熱を持って話してくれて、参加者もすごくのめり込んでくれる。

２　明治記念館下張り文書はがし体験教室

文化財修復士等の指導を受けながら、木枠に貼られた古文書を剥がす。建物を建てる際に、壁の中に何層も古文書が貼られた木枠があり、その古文書を剥がしていく体験。

参加者はほとんどが若い女性。

３　縄文土器の調査

土器の中に種や虫が入りこんだ圧痕を調べるもの。本物の土器を洗い、虫眼鏡で確認して、穴があったらシリコンで型を取り、その圧痕が何の植物か植物考古学の研究者に同定してもらう。

４　アート＆サイエンス

大阪のインターナショナルスクールの子供たちを招待して、遺跡の竪穴住居の中で日本の伝統芸能の映像を見てもらった後、朝日町の稚児舞の祭りを見に行くという取組み。子供たちが昼間作った工作の発表会もした。

・本日の会議資料中、祭りの継続ができない等の文化に対する不安が１１％程度だったが、文化について不安がないわけではなく、おそらくそれより大事な事があって、文化という回答に至っていない。まず生命や財産に対する安全が一番大切なので、なかなか文化という回答が出にくいのだと思う。地域の文化をまず、みんなが知っているというところから始めて、遊んでほしいということをやっている。

・生命、財産が最も大切だが、文化も大切と思ってもらうために、どんなふうに価値をわかってもらうか、そこをやっていかなければならないと思う。みんなで考えていきたい。

【山崎委員】

・20歳までは茨城県で育ち、20歳のときに渡米。アメリカで就学、就職、転職、起業して、２回目の起業で今のMITSU　YAMAZAKI　LLCという会社を設立。日米において都市計画と国際事業の立ち上げ支援をメインとして、日本では地方創生や地域づくりの支援をしている。

・職歴としては、アメリカのゼネコン営業、テキサス州のSan Antonio Economic Development Foundationという経済開発機構のようなところで経済開発の仕事をした。2012年にポートランド市の開発局に公務員として勤務するなど、土地の開発から都市をデザインするような仕事までいろいろやってきたが、土地に張りついた仕事と、その土地に誘致されたり投資が来たりみたいなことのかけ橋的な仕事の両方をやってきた。

・会社のビジョンは都市の進化をデザインすることで、どこの都市でもいいし、都市じゃなくてもいいが、住んでいる人たちが将来どういうことをしたいかというのを具現化して、実現に近づけてあげるお手伝いをすると。持続可能な住民が住み続けて、次世代、次々世代まで残せるようなまちをつくる計画をつくっている。

・柏の葉スマートシティ・キャンパスという場所の拡張工事マスタープランの支援をして、ここで初めて本格的な大規模の都市計画・都市デザインに関わった。そこで都市計画課・地域の経済開発課・建築家が話し合うときにファシリテーションが必要で、そのためには地域の人たちの意向や法律などを全部分かっていなければいけないのに、実際それができる人が日本にいないということが分かった。今でも、全体像を把握した上で、どこに穴があるのかというギャップを埋めることを考えつつ、将来のビジョンをつくっている。

・企業のビジョンをつくったりマーケティングを考えたりといったプロデュースもやっている。例えば無印良品。アメリカで２番目に大きな旗艦店をポートランドで立ち上げるときに、どういった取組をすべきだというコンセプトを考えて、その時期から場所を選び、内装も建築家と話し合ってつくり、お店のオープン前から地域のプレーヤーと連携してつくっていった。アメリカで１番、２番の売上げを出した店で、コロナ禍において無印良品の半分ぐらいの店を畳んだ中で、この店だけは全然畳む予定もなかったような店ができた。

・富山県では南砺市の旧井波町に関わっている。地域の方々が作ったクラフトユニバーシティ構想実現可能性調査から始まり、今は井波地域全体の2040年のビジョンづくりの手伝いをしている。並行していろんなプロジェクトが起きているので、その企画づくりから実際の支援までを、地域のジソウラボというメンバーと南砺市と手を組みながらやっている。

・今は都市計画の仕事ばかりをしているが、その地域に必要なもののプロデュースや人とつないだりとか、そういったことをメインに富山でも頑張っている。

・田園地域についても、人が集まっているという点では都市とシステムは似たり寄ったり。そのため、集落ができてしまえば小さい町のほうがやりやすい。

＜会議資料３に対して＞

・全体に同じサービスはできないので、県として重点的に力を入れたいところで、ちゃんとやる気があるプレーヤーがいるところのリストをお願いする。県全体で３分の２が中山間地域となると、この専門部会で何をやっても通用しない。切り分けて、部分的に考えていかないといけない。

・地域コンシェルジュについて、専門家がコンサル的役割を果たすのは大事だが、その裏側として地域にプレーヤーがいない。行政が専門家を派遣しても、実際にマッチングされていないところにたくさん人がいたりする。新たに中山間地域で事業を起こす等のチャレンジをする人が1人いたら、その人の必要分野の人を何人もあてがえるぐらいのことをしないと、成功は難しい。

・ちょっとした支援で地域のためのサービスだけに特化してしまうと、各地域ではお金の総量が増えない。なので、必ず指標として、支援をするに当たって、必ず新しいお金が入る仕組みまで考えるということを念頭に置いて、専門家をあてがったり支援をしたほうがいい。その辺も今後お話しさせていただければと思う。

【明石座長】

・富山県に来て１３年。東京でまちづくりコンサルタントとして、過疎地域の活性化として、市民の皆さんとつくった地域のビジョンを社会実験というやり方を通して、実装するまでを市民と一緒に考えていくということをやっていた。

・実は富山に来ようと思った最初の頃、農業をやろうと思っていた。農業の中でも自ら自然栽培をやりながら、自分たちが暮らす小さな集落のまちづくりに関わるというイメージを持って富山に来ようとした経緯があり、農業に非常に関心がある。

・持続可能な田園地域を考えるためには、しっかりとした地場産業が根づいていないといけない。今後は有機とか自然栽培というのは当たり前になっていく。それが主力産業になるような中山間地にして、それらを基盤に観光や新しいサービスが生まれたり、場づくりにつながり、その場が有機的にコミュニティーとリンクしているというような絵をつくりたい。

・やっぱり県で一番強いのは条例をつくれること。県の事業と市民とが組むとすごいパワーを発揮する。このメンバーの皆さんと一緒に、県で新しい仕組みをつくることに取り組んでいくことは、すごく意義があると思っている。

・去年、北海道に移住して農業をしている柴咲コウが師匠としているのが、菌ちゃん先生という人。吉田俊道先生という県職員だった方。非常に簡単に野菜がばんばんできる土づくりができるというので、この菌ちゃん先生は年間150講演ぐらいやって、今とても人気の方。公園のかちかちの土であろうと、菌が土を育ててくれれば、約二、三か月で野菜が育つ土になるという考え。ちょっと変わった農業というか、普通の農業よりも、ハードル低く誰でも取り組める農業を広げていったら面白いと考えている。

・古巣のＮＰＯ地域交流センターで、道案内とトイレと町の案内人がいれば、どこでも登録できる「まちの駅」という取組みを約20年以上前からしている。当時は東京に住んでいて、あんまりぴんとこなかったが、今、富山に１３年暮らして、２周ぐらいぐるぐる回って、こういうところが必要だなと考え始めている。

・朝日町のバタバタ茶を飲める場所を見たときに、こんな場所がいっぱい富山に沢山あればいいなと思った。ここに行くと常に地域のおばちゃん、おばあちゃん、おじいちゃんがいて、何だか楽しそうにバタバタ茶をばたばたばたばたやっていて、いつも誰かと笑っていて、お菓子とか漬物を出してくれて、気軽に話しかけてくれて、１時間もいれば仲よくなって、また来るよみたいな。バタバタ茶、おいしいから買っていこう、と商品も売っている。

・都市部でも中山間地でも同じだが、その町に行っても玄関口がないというか、人との接点がなかなかなくて、かといって公共施設の職員と話しても話が深まっていかない。地元の人と急に知り合うときに、こういう場所がないと関係人口の増加につながらないのではないかと思っていて、こういう場所づくりも必要と思っている。